

韓国渡航報告レポート

韓国渡航参加者一同

私たち理学部の学生10名は、理学部の海外交流プログラムの一環として、ソウル大、KAIST という韓国の有名な大学2校に訪問する機会をいただいた。以下、今回の渡航の成果を報告したい。

各学科の3、4年から我々10名が選ばれた時は、韓国に行く日程のみが決まっている状態だった。そこから、韓国の大学の方で同じく選ばれた学生とメールでやりとりをしつつ、「ここに訪問したい」「皆でこんなイベントを企画したい」などと提案を出し合い、手作りで一からスケジュールを組んでいった。

最初に訪問したのは、韓国の科学技術系大学で最も名を知られる KAIST である。米国の MIT を参考にしたという KAIST のある大田は、日本のつくば学園都市のようであった。広々とした敷地に建物が点々と立てられていて、徒歩のみで構内を移動するのは不便にさえ感じられる。国策として有能な学生を集め、科学技術者を育てようとしている KAIST の施設を見ると、日本とは教育に対する気合の入れ方が違うといわざるを得ない。

しかし日常生活をここで過ごしていくと、大学の抱える事情は日本とは変わらないな、というように感じ始めた。学生達に話を聞くと、冗談交じりで KAIST の教育制度は破綻していると言う。理科教育ばかりで、例えば哲学というような教養を身につける機会が少ないことを不満に思う生徒もいるようであり、勉学のストレスもあり、そしていじめ問題もあるという。韓国の学生から、黒板をただ写すだけの授業が多くて面白くない、との嘆きを聞いて、こちらも嘆息するしかなかった。

日本と韓国の学生で違うと思われる点を挙げれば、海外への志向がやや強いという点であろうか。理学部だけあって？ 将来の進路はまだ漠然としている人が多いが、大学院の選択肢として、海外への留学はかなり有力な候補であるようだ。こちらから見ると韓国の研究環境も十分に整っているように思うのだが、どうなのだろう。

KAIST が MIT や筑波学園都市をイメージさせるとすれば、韓国の国立大学のトップをいくソウル大は、東京大学、それも駒場キャンパスをイメージさせる大学である。キャンパスには所狭しと建物が並び、あちこちにポスターが貼られ、そして学食に長蛇の列が出来る。大学に入ってから、幅広い分野の教養科目を履修する点も同じである。ただ、深夜まで開いて勉強の場を提供する図書館、そしてその中にいる学生の意欲には韓国の優位を感じてしまった。

KAIST でもソウル大学でも、研究室を多く見学する機会に恵まれた。それを通し実感したのは、研究の手法自体は万国共通なのだ、という（ある意味当然の）事実である。日本で見たことのある機材、実験器具がそこかしこに並んでいる。実験室の配置、雰囲気にも全く違和感はない。科学という営みがいかにグローバルなものか、逆にいえば画一的なものか、改めて思い知らされた。科学を職業にする人は、まるで分野ごとに一つの国、文化を共有するかの如く、同じ言葉をしゃべり、同じ価値観を持つ。無論韓国にも独自の研究風土のようなものはあろうが、短い見学でそこまでつかむことは出来なかった。

文化的な違いは非常に興味深かった。朝起きて外に出ると、ニンニク臭がする。どこにいてもこのにおいはあった。そして食事にはいつもキムチがあり、空気がニンニク臭でいっぱいになるのも納得できた。食べ物は赤いものが多かった。古い建築も赤が鮮やかだったので、赤が重要な意味を持つのか尋ねたところ、韓国の学生はそう言えば赤が多いなんて気が付かなかった、と言っていた。文化の当事者には当たり前で見えないことがあることを実感し、私自身も日本の文化について当たり前過ぎて意識しないことがたくさんあるのだろうとふと思った。

KAIST では学生との交流の機会があり、KAIST の学生が我々と行動をともにしていた。彼らは、いつも私達が快適に過ごせるようにとても気を使ってくれた。できる限り私達の行動に合わせていっしょに行動してくれて、どうしても授業がある時はこのプログラムとは無関係であるが同じ学科の別の学生が案内をしてくれたりした。彼らとはいつも一緒にご飯を食べ、空き時間にはバスケットを楽しみ、企画した討論会では熱弁を振るってくれた。彼らのおかげで、この韓国訪問は何倍にも実りのある、楽しいものになったと言っている。改めて感謝するとともに、その親切な心配りを、国際交流の模範として心に刻みたい。

また、この実り多きプログラムを提供して下さった理学部の先生方、暖かく迎えていただいた韓国の先生方、そして、この渡航の事務手続きを担当し、学生の自主性を最大限尊重しつつ私たちの行動を見守っていただいた五所さんはじめ国際交流室の方々に御礼申し上げます。私たちに最高の機会をご提供いただき、本当に有り難うございました。

第2回理学部海外渡航制度（韓国）

五 所 恵実子（理学系研究科・理学部国際交流室）

2001年3月19日から27日までの9日間、2名の留学生を含む学部生10名は東京大学と理学部が交流協定を結んでいる韓国のKAIST（韓国科学技術院）とソウル国立大学を訪問し、研究室や授業の見学、そしてそれぞれの大学の学生との交流を体験した。このプログラムは理学部の学生が海外の大学を訪問し、その国の教育制度、大学の環境や研究施設を自分達の手で見る機会を与えると同時に、相手大学の学生との交流を通じて国際理解を深めてもらうことを目的として1999年から隔年で行われている。前回のアメリカ、インディアナ大学訪問から数えて2回目を迎える今回は隣国、韓国を訪問する機会に恵まれた。

最初に訪問したKAISTは教職員数687名、学生数は学部生2,595名、修士1,653名、博士2,427名と大学院生が圧倒的に多い大学である。通常韓国の大学は教育省のもとで予算配分が行われるが、KAISTは韓国政府が優秀な科学者の育成を目的として資金を出している大学の一つであり、科学省の管轄下で潤沢な資金が配分されているため、学生の大部分に奨学金が与えられている。理工系学部のキャンパスはソウルから南に車で2時間半ほどの街、大田（テジョン）にあり、学生の約9割は構内にある寮に住んでいる。金浦国際空港では既に何ヶ月も前から学生達とメールで連絡を取り合っていたKAISTの学生2名が出迎えてくれ、大田までバスでの道中、学生達はまるで以前からの親しい友人のようにすぐに打ち解けて韓国語や日本語を教えあったり、話をしたりしてとても楽しそうであった。

5日間のKAIST滞在中、学生達が研究室を訪問している間に、カウンセリング室で学生相談について話を伺った。ここでは学生からの相談を待つだけではなく、月に1回、カウンセリング室の方から寮に学生を訪ね、質問や話を聞いてケアすることも行っているそうである。興味深かったのは、KAISTの学生の中には自然科学の科目を中心に学ぶ科学高校（Science High School）に2年間通い、そのままKAISTに推薦入学する学生が少なくないため、ほとんど社会科学や人文科学の科目を学ぶことなしに進学してきている学生も多い。その結果KAISTに入学後「自分はこれで良かったのか」と進路について悩む学生がいるようで、学生達に直接この点について質問したところ、やはりこのような悩みをもっている学生はかなりいるようである。またキャンパスが大田の町の中心部から離れたところにあるため、キャンパス内に住む自分達は現実の社会と隔離された状況にあるのがあまり良くないという学生の意見もあった。

今回の訪問を全面的に支援してくださった自然科学部長の金容海先生と化学科教授の李先生の話では、

KAISTでは教科書も英文で書かれているものを使い、授業も英語で行われているが、英語での授業で学生がどこまでちゃんと理解出来ているかは分かり難く、果たして英語だけで教えるのが良いのか疑問もあるそうである。また学部の卒業要件としてTOEFL550点を課しているが、近年この点数に届かない学生が出ているためTOEFLのためだけに1年留年することも問題となりつつある。いろいろな課題がある一方で、KAISTではキャンパスでインターネット化が進み、学生は寮の自分のコンピューターから課題を手に入れ、オンラインで教員に提出するシステムが既に整っているのには感心した。

次に訪れたソウル大学は教員数1,544名、学生数は学部生23,000名、大学院生8,000名で16の学部、4つの大学院、93の研究所や関連施設から成り、ソウルにあるKwanakキャンパスには11の学部、2つの大学院、そして28の研究所等がある。週末をはさんで4日ほど学内の宿舎に宿泊し、キャンパスやラボツアーをしていただいたが「ソウル大、歩く馬鹿」という表現もあるほど、さすがに総合大学だけあって広いキャンパスであった。現在裏門近くの山を切り崩して新しい宿舎や建物を建設しており、昔に比べてキャンパスの面積は倍ぐらいになったそうである。大きな図書館の中に入るとたくさんの学生が寸暇を惜しんで真剣な眼差しで勉強に励み、また昼食時の学食のみならず夕方にはバス停前にも学生の行列が出来ていた様子は大変印象的であった。学生達もKAISTとソウル大学という2つの大学を見ることにより韓国の大学に対する視野が広がったようである。

帰国後、4年生は東大の大学院に進学し、3年生は卒業に向けて忙しい日々を送っているが、将来留学したいと思い始めた人、同じ研究室の留学生と交流し、困っている時に助けている人など、みなそれぞれに今回の経験を活かして学生生活を送っている。たとえ期間は短くても個々の参加者が今回の韓国訪問から得たものは大きく、学生達は新たな刺激と友人を得たようである。若い彼らの環境適応力と体験吸収力に感嘆させられると同時に、これからもひとりでも多くの学部生が参加出来るように海外渡航制度を続けたいと思う。

2001年9月にはKAISTの学生6名が東大理学部を1週間訪問。学生同士、再会を喜び合うと共に、今度は東大の学生が彼らに付いて自分達の大学と東京を案内してまわった。国際交流とは相互交流であり、互いに支え合うことが国際理解の一步となる。プログラム運営に当たりお世話になった東大理学部の先生方、職員の皆さん、受け入れてくださったKAISTとソウル大学の教職員の皆様に深く感謝するとともに、今後ともこのプログラムへのご支援をお願いしたい。

